

舎の中はもとより、外の空地も兵隊で充滿している。草原で野営する。

いつの間にか、この收容所の人数が順次減っていく。後で思えば、シベリアへ連行されたのであるが「出発、<sup>グバイ</sup>出発」と出発して行く。

ソ連の軍医がきて、元氣そうなものから連行する。中には希望してその中に加わる者も。私は、満鉄在職当時、軍事輸送計画に関連して、第一次世界大戦の記録を研究していた。戦後一か月や二か月で捕虜が祖国に帰った例はない。ソ連軍の軍医の検査を受けるが、神経痛のため歩行困難の故をもって收容所に残留して越冬する。

收容所は、ノモンハン事件のとき急設した粗末なバラックで、下はようやく座れる程度の高さに二階を設けた棧敷である。夜は同じ方向に頭を向けて寝ることもできないから、交互に反対方向を頭にして寝る。入浴もなければ、洗濯もない。シラミが繁殖するが、日当りに出て裸になってつぶすより仕方ない。

十月頃からであろうか、発疹チフスが大流行する。

にわかに発熱して意識も遠くなる。薬品らしい物はくれたが、なんの薬かわからない。夜中に奇声を発したり、うなったりして、つぎからつぎへと死んで行く。私をはさんで両隣で三人死んだ。死ぬと軍服をはがし、裸同然にして死体壕に放りこむ。すでに死んだ同僚の遺体が積み重なっている。

今はあの壕はどうなっているのだろうか。土に埋もれた白骨壕のままではなからうか。

## 終戦時を偲んで

鳥取県 坂出 武雄

終戦当時、私は清州電信電話牡丹江管理局で、人事、厚生などの業務に従事していた。

八月九日早朝、非常呼集で出勤して以来、前線から避難してくる社員の受入れに追われた。幸いに七月中旬、秘密裡に命令を受け、私が作製した「前線社員收容計画」に基づき、おおむね円滑に各社宅に收容する

ことができた。

多忙のうちに数日が過ぎたが、この間家に帰る余裕もなく、僅かに数点の着替えをとどけさせたに過ぎなかった。

そうこうするうちに、牡丹江上空をソ連機が飛び交うようになって、前線社員を受け入れたものの、牡丹江も避難せざるを得ない状況となる。一部の幹部、家族はわれわれと運命を共にするんだと言って、避難を認めない人もあったものの、「家族がいては思うように戦えない」という声が大勢を占め、ついに家族を新京へ避難させることとなった。

貨車をなんとか手配できたので、数人の社員（在郷将校の社員）をつけて、八月十二日昼、新京に向けて出発させた。

「貨車の中は、むし暑く、水も便所もなく、乳のみ子をかかえて、死ぬ思いだった。三日かかって、ようやく新京に着き、駅前に集合していると、銃をかまえた満軍と警察に包囲されて、生きた心地はしなかった」とは家内の言葉である。

私たちも牡丹江から避難することになり、数人の保

安要員を残して、十二日夕方、徒歩で牡丹江を出発、途中、密安、東京城などの駅舎を焼き払い、野宿を重ね、鏡泊湖を経て、十六日午後敦化に到着した。

終戦は十五日敦化の手前で聞いたが、覚悟はしていたので、たいした感慨はなかった。

ここで敦化に暫定的に牡丹江本部を置き、新京への幸便を待つことになったが、ソ連軍用列車のみで、我々の乗れるものは何一つなかった。

遂に九月八日で敦化に止ることを余儀なくするに至ったが、この間、電話交換業務だけは遂行するように命令された。

避難場所へは時折、ソ連兵が酔って拳銃を持って押し入って来たりして、安心はできなかった。八月末、ソ連兵二人が、「隣の駅まで歩いて行けば列車がある、護衛してやる」とのことで、女子二十人ばかりに、年輩の男子二人をつけて、出発させたが、ソ連兵にだまされて、途中で二人の犠牲者が出たので、引き返したという出来事もあった。痛恨の極みである。

九月九日、ようやく吉林に向けて出発したが、車中のソ連兵の暴虐は、目にあまるものがあつた。

吉林では、駅員に馬鹿にされて、切符の窓口は、あちらだ、こちらだと振り回されてなかなか切符を売つて貰えず、うずくまっておれば中国人に、ツバをかけられたりしながら、ようやく夕方新京に着くことができ、室町小学校に宿泊した。

翌十日ようやく、家族が避難していた、緑園の電々青年学校寮にたどりつき、家族と面会することができた。

この寮には、われわれ十数人の家族持ちのほか数人の留守家族、約二十人ずつの青年および女子社員がいた。

そこでまず食べることを、婦女子の安全を確保することを第一とした。

婦女子の安全の確保については、青年数人と成年男子一人を歩哨にたて、ソ連兵が来ると、ベルを鳴らして、婦女子を地下室に避難させ、入口に鍵をかけて入れないようにした。

私も歩哨中、ピストルを持ったソ連兵に両手を挙げさせられたことがある。

食べることについては全員がなけなしの金を出し合つて、まずジャガイモ畑を買収して最低の食糧を確保した。

又馬車を購入して、満語の上手な者を責任者として、旧市街での仕入れに行かせ、寮の中に売店を開き雑貨類を販売した。

大福餅なども製造販売したり、豚を処理して肉を売つたりした。

市内のビルにも寝起きして、露店を開き、野菜を販売したりしたが、この開拓した場所を満人にとられたりもした。

八路军が進撃して来た時には、私も三回恐い目にあつた。特に八路军が、わが寮の二階廊下に三日間宿泊して、中央軍と銃撃戦をくり返し、われわれの室の壁に銃穴があいたりして、ジッと息をひそめていた。

こうして二十一年七月、引揚げの日まで戦つたが、大人二人、幼児数人を亡くした。

私の長女もハシカで亡くしたが、夫婦共無一物で、郵便貯金なども引き出せず、息をひきとるのを手をこまねいて見守っているのみであった。

## 八月一日！追想

岡山県 平松 純 夫

四十六回目の八月十五日がめぐってきた、人間には理性のみでは解明し得ないことが起きるものである。これを偶然と云い、あるいは運というのであるうか、禍福はあざなえる縄の如しという。五十九回目の八月一日、私の身の上を次々と変えていった最初の日である。

農家の末男として生れた私は大学へは望むべくもなく悩んでいた折、降って湧いたように満州鏡泊学園が誕生した、学園創立者の山田悌一先生の思想に感銘し、昭和八年四月一日学園に入学し、八月一日、二重橋前で深々と祖国決別の頭を垂れ、神戸から出航し、在満

十二年の歳月を経、再びわが身の上に降りかかった転機、それが大東亜戦争終結の年、昭和二十年八月一日であった。この間の十二年にわたる歳月を一寸振り返って見る。

学園生の夢は大東亜平和御連校の礎となれと実父の如く育くんで下さった山田總務と幹部職員を不慮の遭難で失い、遂に学園解散、よって私は同志四十五人と第四次城子河開拓団に入団し、昭和十年鶏西駅に接する城子河に入植した、営農の基礎も固まった折柄、当地区が無煙炭埋藏地区と判明、国策遂行のため己むなく移転、昭和十五年、吉林省舒蘭県開拓地区に転入植した。

そして、昭和十六年の大東亜戦争へと突入した。我々学徒は平和御連校の五族協和が根本理念であったところから、戦況不利になっても別に異常は無かった、しかし一般在留日本人の不法行為や優越感もたらした怨嗟は戦況の悪化と共に表面に出はじめた。

神州不滅の信念も身に迫る不穏な空気で揺るぎはじめていたさ中、遂に八月一日、根こそぎ動員の召集令